

柳家花緑さん

[落語家]



うまくやろうとするほど失敗する

僕が初めて高座をつとめたのは、小学校3年の時。祖父の柳家小さんの落語会でした。この様子がテレビで取り上げられ、僕自身も出演したんです。その時、学校では、僕が出ているテレビをクラスのみんで見ていたそうです。おかげで、学校では一躍スター扱いでした。

「落語家になる」という自覚が芽生えたのは、6年生の終わりごろ。中学校に入ると前座修行の真似事も始めました。そして、中学卒業と同時に落語界に就職しました。

落語家は「話すこと、語ること」のプロ。そのため、よく「うまく伝えるにはどうしたらいいか」と質問されます。ですが、僕自身の経験から言えば、「うまくやろう」と思った時ほど、実は失敗することが多いのです。

落語がうまくできたからといって、お客様が笑ってくれるとは限りません。それどころか、全くうけなかったりします。「うまくやる」と「伝える」とは、全くの別物なのです。「一生懸命に楽しんでいる姿を見てもらいたい」という情熱だけをもって取り組むほうが、相手にも伝わるし、よい反応が返ってくる。もしかしたらこれは、学校の先生も同じかもしれませんね。

「弟子は師匠なり」その心は

現在、僕は10名の弟子を抱えていますが、「弟子は師匠なり」と思っています。

僕にとって弟子は「教えることの本質を教えてくれる」存在です。

多くの弟子を見てきた僕が今感じるのは、教育は「どう教えるか」ではなく、自分自身が「どうあるか」の方が大事だということ。どんなに良いことを弟子に言ったところで、師匠自身にそれができていなければ、弟子の心には何も響きません。言葉で取り繕うよりも、普段、弟子にどういう姿勢を見せているかのほうが、はるかに説得力があるのです。

振り返ってみると、祖父は、言葉ではなく、その生き様を、生涯を通して後進に見せ続けた教育の実践者でした。僕も、いつなんどき、弟子に見られても恥ずかしくないような生き方をしています。

楽しみながら目標に取り組もう

先生方もおわかりのように、人を動かすのはとても難しいこと。自分がいくら情熱をもって取り組んでも、思い通りにならないこともあるでしょう。

しかし、人の成長の度合いはそれぞれ違います。急がせてはいけません。子どもが何か失敗した時、大人はすぐに「だから言ったじゃない」と言いますが、僕に言わせれば、それは禁句に近い。「やれ」と言っているのであれば、みんな天才です。

子どものころ、僕は成績が良くなく、五教科はずっとオール「1」。しかし、図画工作や音楽はいつも「5」。プラモデルやブロックを組み立てるのが大好きで、絵を描くことやピアノ演奏も得

意でした。ですが、「うまくやろう」とか「いい成績を取るぞ」なんて、深刻になっていたわけではありません。ただ、楽しくてやっていただけです。

このように、楽しみながら目標に向かうことを「真剣」というのだと僕は思います。「深刻」にやってしまうと、まるでお葬式のように、笑顔がありませんね。

学校教育は、笑顔で陽気に、いかに「真剣に」やるかがポイントだと思います。

寺子屋のやり方があってもいい

江戸時代の寺子屋では、同じ「字を書く」ことでも、その子によって内容はそれぞれ違っていました。八百屋の子は八百屋になるために必要な字を、大工の子は大工の仕事に必要な字を書いていた。

僕は、今の教育にも、寺子屋的なやり方が復活するのと思っています。算数が好きな子は算数に集中できて、途中で他の教科に自由に移ることもできる。全部やりたい子は全部やればいい。

全員が同じことを、全て同じようにできるかどうかジャッジするのは、子どもの間に摩擦を生み、優越感や劣等感など、余計なものまで負わせてしまいます。

ひとつの基準に向かって子どもたちを競わせることなく、得意なこと、好きなことを通して思考力を鍛え、プロフェッショナルを目指す。

これからは、そういう形もありではないでしょうか。

PROFILE

やなぎや・かるく●1971年東京都出身。中学を卒業後、祖父五代目柳家小さん入門。前座名は九太郎。1989年、二ツ目に昇進し、小緑と改名。1994年、戦後最年少の22歳で真打に昇進し、柳家花緑と改名。スピード感溢れる歯切れの良い語り口が人気で、古典落語はもとより、新作落語を洋服で口演する「同時代落語」にも意欲的に取り組む。また、子どもたちへの落語普及の活動にも力を入れており、テレビ、舞台などでナビゲーターや俳優としても活躍中。

何をどう話すかよりも、情熱をもって取り組む姿を見せることが大切